福島県立図書館
東日本大震災福島県復興ライブラリー

# ブックガイド

Ｎｏ．５
２０１３．１０．１０

■文学・体験記

『ドキュメント震災三十一文字　鎮魂と希望』
NHK「震災を詠む」取材班／著　NHK 出版 2012.4　369.31/ニツ 124

NHKふれあいミーティングの企画「震災を詠む」で紹介された、被災者の短歌と体験が綴られた本です。友人の被災状況に言葉をなくしたこと、町から子どもがいなくなっていく状況に恐ろしい民話を重ね合わせたこと、震災に遭っても立派に立つ名勝を誇らしく思うことなど歌の内容はさまざまですが、どの短歌にも震災を通して得た万感の思いが余すところなく表現されています。「歌を詠むことで前に進める」と詠み手の方々は言います。悲しみだけではなく、復興への希望が込められた一冊です。

『災害支援に女性の視点を！』
竹信三恵子・赤石千衣子／編　岩波書店　2012.10　369.3/タミ 12X

避難所では我慢が強いられます。男性中心に運営されることが多いため、弱者の声が反映されにくいのが現状です。東日本大震災後の多くの避難所や復興現場での事例から、「女性の視点」で今後に活かす災害支援を考えていきます。我慢をしなければならない中で、少しでもストレスが緩和されるような運営マニュアル例も提示され、今後に活かされていくことが期待されます。

『原発避難民　慟哭のノート』
大和田武士・北澤拓也／編　明石書店　2013.3　LS916/O19/1

原発事故で住み慣れた故郷を追われ、避難生活を余儀なくされた福島の人々の生の声を集めています。来るはずだった明日、思い描いていた人生・未来が突然奪われたということ、代々先人が築いて維持されてきた山・耕地・風景が消えてしまうことへの深い悲しみ。二度と同じことが起らないために、原発事故について語り継ぎつづけること、忘れないことの重要さを強く感じます。

■各組織の震災対応

『復興の書店』
稲泉　連／著　小学館　2012.8　024.12/イレ 128

「本が何に役に立つのか」。震災の直後、図書館員の多くはこの問いに直面しました。そして、ある者は震災の対応に携わりながら、ある者は図書館の業務を行いながら考え続けました。
被災地の書店の方たちも同じ問いに直面していたのです。ある書店さんは津波の被害にあいながらも、新学期の教科書の準備に励み、ある書店さんは応援を受けて移動書店を開店しました。また、原発事故により避難を余儀なくされ、地元での再開を決意して開店した本屋さんを待っていたのは…。「被災地で本が何の役に立つのか」。1つのこたえがこの本にあるように思えます。

■復興・防災

『きちんと逃げる。 災害心理学に学ぶ危機との闘い方』

広瀬 弘忠／著 アスペクト 2011.9 369.3/ヒヒ 119/

災害対策は、本来、災害を未然に防ぐ「能動的安全性」と、災害時の被害をくいとめる「受動的安全性」の両面から考える必要があります。日本の防災は前者を重視してきましたが、今回の津波・地震はそれをはるかに凌駕する規模であり、原発事故では事故後の不手際が事態を悪化させました。 防災は「能動的安全性」の面からだけではなく、政府、個人共に災害後にとるべき行動を考えることが大切です。災害心理学の研究者が震災 6 ヶ月後に出版した本ですが、2004 年に出された同著者の『人はなぜ逃げおくれるのか―災害の心理学』(集英社新書)と共に「きちんと逃げる」ということを考えます。

『ふくしま・震災後の生活保障 大学生たちの目で見た現状』

菊池 馨実／編 早稲田大学出版部 2013.4 LS543.4/K44/1

早稲田大学法学部と、福島大学行政政策学類の大学生達が、震災から2年が経った福島の現状や問題について、調査を行った結果をまとめた本です。焦点をあてたテーマは、「子ども」「コミュニティ(障害者支援、県外避難)」「家族」「介護人材」「学生」「雇用」。いずれも重大で今後も避けては通れない問題ですが、学生達はひとつひとつ真摯に調べ、その自由な立場から、考えを述べています。我々が福島のこれからを考える上で、ひとつのヒントになるのではないでしょうか。

■エネルギー

『電力 現状と新発電法 期待の発電法と新エネルギー』

ニュートンプレス 2012.8 543/テン 128/

原発事故以降、電力やエネルギーに対する関心は非常に高まりました。科学雑誌ニュートンの別冊である本書では、電流や電圧といった電気の基礎から、今後の日本の電源として期待されている太陽光発電や地熱発電、波力発電などのさまざまな発電方法について、イラストを用いてわかりやすく解説しています。また、将来的なエネルギーとして宇宙太陽光発電や核融合発電にも触れています。私たちの生活に密接に関わるエネルギー問題について考えるうえで参考になる1冊です。

■子ども向け

『東日本大震災伝えなければならない 100 の物語』(全 10 巻)

学研教育 2013.2 369/ヒ

このシリーズは、自衛隊員・消防隊員・役所職員・医師・スポーツ選手・芸能人・主婦・子どもたちなど様々な人たちが、それぞれの視点から見た東日本大震災を、全 10 巻、1 巻 10 話で 100 話紹介しています。 全ての物語は震災の前から始まります。その人がこれまでどんな道を歩んできたのか、震災時はどこでどうしていたのか、そして震災後、何を感じどう動き出したのか、細やかな取材をもとに、丁寧にわかりやすくまとめられています。総ルビがあり、小学校中学年ぐらいからでも十分理解できます。第 5 巻は、放射能と闘った人々の物語です。これからの時代を担う子どもたちに、人間同志の絆の力や生きることの素晴らしさを伝えてくれます。